○日本植物に關する最近の外國文獻（三）（原　寛）

再びアメリカ合衆國で出版されたものの一部を紹介する。Lawrence, G. H. M.; Schulze, A. E. 兩氏は 'The Cultivated Hederas' といふ論文を Gentes Herbarum 6-3 : 107—173 (1942) に發表し，永年に亘つて蒐集したキヅタ類の栽培品に就て詳說し，これを5種と多數の栽培變種に分類した。日本產のキヅタも含まれ *Hedera rhombea* (Miq.) Bean (1914) (p. 129) といふ學名が採用され，フクリンキヅタはその變種 var. *variegata* (Paul) Schulze とされて居る。

Munz, P. A. 氏はトリカブト屬 (*Aconitum*) の內栽培されてゐるもの 26 種を Gent. Herb. 6-8 : 463—506 (1945) で解說して居る。シベリアと日本產の種類の同定が最も困難と思はれると著者自身述べて居て，日本產トリカブトの分類には餘り觸れて居ない。*A. Fischeri* Reichb. (p. 491), *A. chinense* Paxt. (p. 493), *A. volubile* Pall. (p. 505) が載つて居り，*A. japonicum* Th. (p. 502) は *A. subcuneatum* Nakai と同形と解釋されて居る。又ヲダマキ屬 (*Aquilegia*) のモノグラフを Gent. Herb. 7-1 : 1—150 (1946) に發表し，全部で 67 種を認めて居る。ヲダマキは *A. flabellata* S. et Z. (p. 28) として，ミヤマヲダマキも同種に入つて居るが說明が充分で無く間違つてゐる個所もある。北支產のタウヤマヲダマキは *A. oxysepala* Trautv. et Mey. var. *Yabeana* (Kitagawa) Munz (p. 62) として取扱はれて居る。又ヤマヲダマキ (*A. Buergeriana* S. et Z.) (p 94) も圖解されて居る。

St. John, H. 氏は Occas. Papers Bishop Mus. Hawaii 17-7 : 79—84 (1942) でウラジロ科に於ける屬の細分を認めて太洋洲に產する種類の新組合せを發表し，この中でウラジロも *Hicriopteris glauca* (Thunb.) St. John (p. 81) と改められた。

Li, Hui-Lin 氏はキブシ屬 (*Stachyurus*) のモノグラフを Bull. Torrey Bot. Cl. 70-6 : 615—628 (1943) に載せた。大體從來の分類を踏襲し 12 種 4 變種を擧げ，日本產のものに就ても今迄に發表された種を全部そのまま認めて居る。唯臺灣の *S. Sigeyosii* Masam. (1938) は *S. himalaicus* Hook. et Thoms. の異名と見做された。我國に於けるキブシの變異の著しいのを見て居るものにとつては，葉の形や葉柄・花序の長さ等を種を分つ重要な特徵に用ひて居るこの分類は今後再檢討して整理すべきものの樣に感じられる。

Cronquist 氏は 'The separation of Erigeron from Conyza' と云ふ題名で Bull Torrey Bot. Cl. 70-6 : 629—632 (1943) に兩屬の區別を論じて居る。*Erigeron* 屬の內 Sect. Trimorphaea (*E. acris*, *E. alpinus*, etc.) や Sect. Coenotus (*E. canadensis*, etc.) は花部の性質で *Conyza* に接近して居る。殊に Sect. Coenotus の或るものは外觀は *Conyza* の或る種に全く一致するが，外側の小花が小形の舌狀片を有するといふ點だけで *Erigeron* に入れられて居るものもある。そこで彼はこの二屬を次の性質を持つものと定義し，*Erigeron* Sect. Coenotus に屬するものを凡て *Conyza* に移

す事を提案した。即ち *Conyza* は中央の兩全小花が少數，雌花は多數で花冠は絲狀，若し舌狀片がある時も不顯著で筒部より短かい。一方 *Erigeron* は兩全小花は多數時に稍少數，雌花は少數乃至多數で，時に花冠は絲狀となるがその場合には外部のものは少くも冠毛と同長以上の舌狀片を有する。かく區別してもこの二屬の區分ははつきりしては居ないが，極めて近緣だと思はれる二つの種が別屬に入るといふ事は避けられる。*Erigeron* と *Aster* の區別に於ても同様な事があるが，その場合には或る種をそれに最も近緣な種の屬する屬へ入れたい。例へば *E. peregrinus* (Pursh) Greene は，確かに *Erigeron* に屬する或る種に近緣であるから，*Aster* よりは *Erigeron* として扱ふと云ふ。かくて彼はヒメムカシヨモギに對し *Conyza canadensis* (L.) Cronquist (p. 632) の新組合せを行つた。

Ricker 氏はアジア產はぎ屬 (*Lespedeza*) を研究し，主にアーノルド樹木園にある標本に基き，Amer. Journ. Bot. 33 : 256－258 (1946) に新植物を發表した。先づ日本產の新種として *L. anthobotrya* Ricker (p. 257) が記載され美濃產で，或は單にマルバハギの長葉形ではないかと思はれる。中國廣東から白花の *L. albiflora* Ricker (p. 257) が書かれ，ミヤギノハギに似て居るが小葉は倒卵形で蕚裂片が短い。ミヤギノハギの白花品は未だ知られて居ないが，ミヤギノハギは中國四川江西安徽省に自生と思はれるものがあり，日本のものも元中國から來た可能性があると記して居るのは面白い。次に鹿兒島から入手した種子から栽培したシロバナハギの一變種 (*L. japonica* var. *ovata* Ricker (p. 258) が記されて居る。

Beetle 氏はホタルヰ屬 (*Scirpus*) の硏究第 8 報 (Amer. Journ. Bot. 33 : 660－666, 1946) で，既報の本屬の分類に訂正を加へると共にアジア產の新種も記載して居るが，少くも日本產に關する限り不滿足な點が多い。先づオホサンカクヰ (*S. grossus* L. f.) を基として Sect. Hymenochaete (Beauv.) Beetle (p. 661) が設立されたが，大井博士の Sect. Actinoscirpus (1944) の方が早い。北海道雌亞寒から *S. hokkaidoensis* Beetle (p. 662) が記載されたが，クロアブラガヤかケナシアブラガヤの何れかであらう。次にアジア產のアブラガヤには學名がないとして *S. asiaticus* Beetle (p. 662) を記載し，日本の羽後產の標本も引用してあるが，これは明かに *S. Wichurai* Boeckler 種中のものである。又タカネクロスゲはワタスゲ屬であるとして *Eriophorum Maximowiczii* (Clarke) Beetle (p. 663) の新組合せを作つて居るがこれも亦不用で，ワタスゲ屬の下では *E. japonicum* Maxim. (1886) の古い名がある。*S. subcapitatus* Thw. に基いて Sect. Paucispicata Beetle (p. 664) を建てたが，これも Sect. Anthelophorum Ohwi (1944) の方が早い。この節で *S. Clarkii* Stapf の下に琉球產の標本が引用してあるが，この種は日本の學者には知られて居ない。